

〈特別寄稿〉

# 死生観の東西

井上円了の靈魂論

## 加藤尚武

*katou hisatarake*

死生観に東西の違いはない。死そのものに文化・伝統・習慣・生活水準の違いはない。もしも、死生観に文化的な差異が生ずるとしたら、それは死という出来事のコルから発生するのではなくて、死をとりまく周辺の文化的条件から生ずる。

死生観には反復型と一回型とがある。現代ではこの二つの見方が両立不可能であるという見方が有力になってきて、反復型死生観から一回型死生観へと劇的に変化しつつある。かつて熱烈な信仰心によって反復型死生観を語っていたひとが、「来世は信じられない」と語って死ぬことが、しばしばある。しかし、この二つの見方が共存している場合がある。マルクス・アウレリウスと道元を挙げておく。インド人の死生観が共存型だという山折哲雄氏の指摘(1)もある。

反復の生が成り立つ時空と一回の生が成り立つ時空は、まったく別であるからその両者が両立不可能であるという「論証」は意味をなさない。これは、井上円了(1858-1919)が指摘している。死について思索する人の多く

が、この異なる時空を「あたかも共存」させているのは事実であろう。

### 一 死についての二つの見方

反復型死生観は、キリスト教、仏教、イスラム教、ユダヤ教、プラトン、井上円了が示しており、「死は心身の分離であり、魂はあの世に旅立つ」という思想であることが多い。井上円了の場合は、心身の分離態の容認を含んでいない理論構造で、靈魂の不滅を説くという点でユニークである。反復型では前世、現世、来世という形で、生死は反復される。

これに対して、一回型死生観は、エピクロス、荘子、道元、ハイデガー、唯物論、自然主義、科学主義が示しており、「身体崩壊(死)とともに精神は消滅する」という思想である。

反復型では、「この世の生を終えてあの世に行く」という。「昇天する」という。「迎えが来る」という。死んだら魂が体を抜け出してどこかへ旅するというイメージが多い。死ぬと、身体がぼろぼろになって腐って行くことは誰もが知っている。いま私たちはそういう経験をほとんどしないが、源信の『往生要集』が書かれて、地獄の沙汰がいろいろ描き出された頃には、京都の鴨川あたりには、ちょっと歩けば死体がごろごろと転がっていたという。死体を見ないで外を歩くことはできない状態だった。当時の記録を見ると、お寺に集まった信者は、「あなたがもし亡くなったならば亡骸をほったらかしにしないで必ずきれいにお葬式を出してあげます」という約束をしてもらっている。この当時の人びとにしてみれば、「死んだらああいう野ざらしはしてもらわないで済む」と、そういう期待感が信仰によって充足された(2)。

魂がふらふらと飛んで行ってどこかへ行く。ふらふら歩いて、行く路がわからなくなると困るから、お葬式を

出してやると、魂が成仏して筋道を発見して、地獄に行くか極楽に行くか、行き先が定まる。ふらふらすると、生前の恨みのある奴のところへ行って化けて出たり、悪さをしたりする。行き先をきちんと定めてやるためには葬式が必要だ。

キリスト教とか仏教とか教義を整えた宗派ができる前に、原始宗教、すなわちアニミズム、シャーマニズム、トートেমイズムがあつて、社会学者のデュルケムは、靈魂がふらふら歩くとか、小さな形をしているとか、そういう考えを持たなかつた文化は一つもないと言う。

人類が発生したのが二〇万年前で、最古の遺骨が五万年前のもので、埋葬が五万年前からあることを告げている。DNAの分析によって、以後人類の生理構造に大きな進化はなかつたことが分かる。教義を整えた宗派の成立が、三〇〇〇年前であるとすると、魂がからだから脱け出してふらふらするというような原始宗教のイメージが四七〇〇〇年間は支配的だった。それが転換して、仏教では六道とか、キリスト教では天国、煉獄、地獄とか、魂の死後の行き先の教義が作られた。

一回型は、死んだら個人の生はこれでお終いだと言う。からだが分解したら精神もなくなってしまう。それはつきりと理論的に言った人は、西洋ではエピクロス(前341-270)であり、東洋では莊子(前403-221)の戦国時代)である。莊子の影響は強烈だった。吉田兼好『徒然草』では、読むべき本にさりげなく莊子が挙げられている(二三段)。兼好は、浄土的な、あの世に行くという考えとは違う考え方が莊子にあるということを知っていた。

自然観としては両立不可能な二つの死生観が、心情的には両立可能であるという思想状況にこそ、死生観の独自性があるのではないだろうか。

## 二 心身関係の三つの型

死生観は、心身関係の種類と対応している。次の三種を挙げておく。

- 1、離存説（精神は身体をはなれて存在する→二元論、機会因、予定調和）
- 2、根元的同一説（あらゆるものに物質と精神が内在する）
- 3、随伴現象説（精神は身体の随伴現象）

反復型死生観は、離存説と結びつくことが多く、肉体をはなれて存在する不滅の靈魂が、死後、来世を経験する。随伴現象説が、この離存説を完全に否定する。身体をはなれた精神の働きはありえない、身体が崩壊すれば、その随伴現象である精神の活動もまた消滅する。

離存説は、靈魂はからだを離れても存在すると言う。日本では話題にならないが、まず靈魂が先に存在し、その靈魂からだがくつついて子どもが生まれてくると考える文化もある。最近のカトリック回勅に「人間の尊厳を守ろうと献身する人は、キリスト教信仰のうちに、そうした努力の最深の根拠を見いだすことができます。一人ひとりの生は、絶望的な混沌のただ中で、まったくの偶然あるいは際限なき循環に支配された世界の中で、あてなくさまよっているのではない、という確かさは、なんとすばらしいものでしょう。創造主は、「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた」（エレミヤ一・五）とわたしたち一人ひとりにいうことができなくなります。」と書かれている（③「カトリック回勅「ラウダート・シ」六五番）。

ユダヤの民間伝承では、生まれる前の子どもが部屋のかなや天井なんかでふらふらふらしている。そして「俺を早く産んでくれ、俺を早く産んでくれ」と思っているという。靈魂は身体をもつ前から存在していて、身体をもって生まれようと悶えている。靈魂先在説は、プラトンにもある。肉体がなくても靈魂は存在できるという

考え方が、どちらかというところ、今までの世界の文化のなかでは主流派だった。

T・H・ハクスリー(1825-1895)は「ダーウインの番犬」というあだ名がある生物学者である。随伴現象説 epiphenomenalism を主張した。心的なものは脳神経過程の随伴現象である、だから、「からだがなければ心もない」と言う。からだは働いてはじめて心が働く。幻想も、欲望も、忘れたことを思い出すこと(想起)も、全部それは身体の随伴現象だと言う。手足が溶けて無くなって、脳が溶けたら、もう心の働きはない。脳が溶ければ痛くも痒くもない。現代ではこの随伴現象説のほうがはるかに普及している。離存説を信じるのは難しくなってきた。

井上円了は、靈魂の不滅説を主張しているが、それは離存説という前提を含んでいない。根元的同一説(あらゆるものに物質と精神が内在する)という立脚点から、靈魂の不滅を主張している。これは極めて独創的な思想であって、伝統的な思想のなかに同一の類型を見出すことは稀である。

根元的同一説は、西洋ではライブニッツ(1646-1716)の「单子論」にその断片的な表現があるが、ライブニッツはデカルト的な心身二元論の影響も強く受けており、根元的同一説を体系的に展開することはなかった。ライブニッツ以降、ロマン派の自然主義のなかに根元的同一説を踏まえた思想が見られるが、そこには顕微鏡的世界の出現と言う文化的な出来事が結びついている。

顕微鏡と望遠鏡は対象像の拡大という共通の機能をもち、一七世紀初頭にはそれぞれの原理が明らかにされていたが、実用品が作られたのは望遠鏡の方が先だった。ガリレオは望遠鏡の視野の中に「天体は地上物体と根本的に異なる」というアリストテレス説の誤りを見出した。「星は靈的な生命体だ」という説が否定されて、ニュートンによって万物が物理的な因果関係でつながれているという自然像が描き出される。

顕微鏡が、肉眼不可視の微小世界のなかに生命体の姿を見せたときに、極微の自然は生命に満ちているというロマン派的な自然像に道を開いた。そこから根源的同一性の哲学が築かれていったが、実証的な自然科学の動向とは一致しなかった。いわゆる「旧生氣論」は、有機体は有機体からしか生まれまいという。この思想を最初に語ったのは、シュタール (Georg Ernst Stahl 1659-1734) だと言われている。化学史の本では、燃焼の原因は物質に含まれる「フロジストン」であるという間違った学説を提唱した人として描かれている。燃焼に燃焼力の元素があり、生命に生命力の元素があるという錬金術師の考え方だという批評もある。科学的に説明することに成功したのはドリーシュ (Hans Adolf Eduard Driesch 1867-1941) の「新生氣論」であった。

井上円了の根源的同一性の哲学は、やがて鈴木大拙 (1870-1966) に引き継がれて、文化史的に重要な役割を果たすが、伝統的な来世観を変えろという影響は生まれなかった。井上円了は、離存説では納得できないから、もつと別のかたちで考えようと、根源同一説を考える。そこには有機化学の発展史に固有の問題があった。

### 三 アリストテレスとトマス

ヨーロッパの文化では、この離存説と随伴現象説とが何千年という闘いを続けている。一番有名なのはアリストテレスの折衷主義である。先生のプラトンは、離存説の親分、家元である。魂は肉体を離れることができると断定している。生まれる前に勉強してきたことを一度忘れて、再度思い出すのが真理なのだという想起説を唱えた。アリストテレスは、プラトン先生の言っていることは本当だろうか、と一生懸命考えた。靈魂が身体を離れて一人歩きするというのは嘘ではないかと言う。

「靈魂と肉体が一つであるかどうかを探求する必要はない。封蠟と印形が一つであるかどうかを問う必要がないのと同様である。」(『デ・アニマ』421b6)

肉体がなければ靈魂はないのは、蠟がなければ蠟の形もないのと同様だ。蠟という物質的な素材があつて、それに彫り込まれ、刻印された形が成り立つ。素材は實在、存在、形は空隙、穴ぼこ。「凹み鼻」の人のくぼみの形と同様に、蠟がなければ形もない。だから、蠟が溶ければ心も溶けて無くなる。そういう考えをまず出した。ところが、同じ本のなかで、こう言う。

「能動理性は、離在し、作用を受けず、混交せず純粹である。それだけが不死であり、永遠である。」(『デ・アニマ』430a20)

能動理性とは、純粹な哲学だとか靈魂だとか数学だとか、受け身で考えるのではなく自分のほうから考えてゆく、純粹理性である。私が $2+2$ は4だと考えると、これはもしかすると能動理性で、純粹であるから、 $2+2$ は4だという内容そのものは、私が死んでもずっと残っている。純粹理性の場合には、離在が成り立つという。そういう、ある意味では矛盾した考え方、折衷的な考え方をアリストテレスはとった。

アリストテレスを引き受けたカトリシズム、トマス・アクイナス(1225-1274)の思想は、この離在形相がなければ宗教が成り立たないものだという。この話を私は松本正夫先生から授業で聞いた。

「存在者として質料は形相との合成なしには成立せず、これに対して形相は質料なしにも成立する。純粹形相は純粹質料と異なり充分な原因さえあればそれだけで実体的存在者として成立する。最も形相力あるものが質料基体による制約を蒙らないもの、従つて基体なき存在者でなくてはならない。その様な質料なき形相としての純粹形相が純粹質料とは異なつて立派に存在者として成立することが認められた。」(4) (松本正夫「離存・形相の質料・形相論的構成について」)。

これは松本正夫先生が一九六三年に書いた文で、記念碑的な、たいへん有名な文章である。私が大学に入った時、松本先生が東大で授業をやっていた。交通事故のおかげで声が出なくなり、小さな教室で、おまわりさんが使うような携帯マイクを持って、授業をされた。アリストテレスの離存の可能性のなかにカトリシズムが成り立つということを読かれた。

#### 四 井上円了の「離存なき不滅」説

井上円了は、靈魂の離存なき不滅を考える。肉体を離れて靈魂が勝手に飛び歩くという考え方をとらないのに、靈魂は不滅だという。

「古来の靈魂説は、この肉体のほかに別に一団の精神ありて、自在に出入のできるように考え、その精神が肉体中に入れば生活〔生命〕を現じ、肉体を去れば死滅に帰すと唱へたるも、今日の実験〔実経験〕にては、そのように靈魂と肉体と全く相離れて、自由に出入することのでき難きを知りたれば、靈魂説も自然に一変

するに至りました。」(井上円了『靈魂不滅論』初版一八九九年、選集一九卷三四五頁)。

肉体のなかに靈魂が出たり入ったりするということはもう信じられない。——実は、道元がすでに同じことを言っている。——プラトンでは、靈魂不滅説というのは、肉体を離れて靈魂が出て行ってどこかにいるから靈魂は不滅だと言う。離存と不滅は必ず一体になっていて、離存がなければ不滅もない。ところが、井上円了は、「靈魂説も自然に一変するに至りました」と言う。井上円了はその著作のなかで、靈魂が不滅だという説をたくさん書き残しているが、皆、同趣旨である。

「拙者をはじめとし、その他の靈魂不滅説を唱うるものは、大抵、靈魂は肉体と全く相離れたるものにあらずして、むしろ肉体に連結してその裏面に存するものと考えます。その裏面の精神が、物質の集合より成れる肉体の上に作用を現する間を生時と名づけ、退きて裏面に潜むときを死ということになります。」(同右)

物質と生命はいつも表裏一体をなしている。生命すなわち精神が隠れている状態を死と言い、精神が現れている状態を生と言う。物質と精神はいつも一つになっている。これが彼の靈魂不滅説の核心である。

井上は、靈魂不滅論に反対する議論の論駁も何度も書いている。反対する人たちによくあるのは「音信論」というもので、「死んだ人があの世に行つてからこの世に手紙を寄越した例がない、音信不通である、だからあの世などというものは存在しないのだ」という論拠で靈魂不滅を否定する人がいるが、あの世とこの世は両方行つたり来たりできるものではない、全然別の次元にあるのだから、音信がないからと言って、靈魂が不滅でないなど

ということとは間違いだと言上は言う。

その靈肉一体説をもう一步進んだかたちでもって認識しているのが、活物靈体説である。

「人間、動物は活物である。この活物はゴッドが造出したとせざる以上は、必ず宇宙自体より産生したとせねばなりません。すなわち、宇宙自体はわれわれ活物の親である。子が人間ならば親も人間、子が猿ならば親も猿であると同様に、子が活物なれば親も活物なることは、これまた決して、疑われぬ道理である。」(同右三三七頁)。

生命体から生命体が出てくる。生命体なしには生命体は出てこない。生命体では、精神と物質が一つになっているが、それが永遠に繋がっているという説明をつける。井上は、茶の湯の世界で、掛け軸によくある名句を引用する。

「古松は般若を談じ、幽鳥は真如を弄ぶ」

意味は、古びた松は仏教の真理である般若波羅蜜多の話をしている。松が古くなって風にそよぐ。それは松が般若波羅蜜多の議なのだ。

「幽鳥は真如を弄ぶ」 かすかに見える鳥は、仏教の真如を現わしたり、隠したりしている。

「溪声すなわちこれ広長舌」

溪のせせらぎがずうっとざあざあざあと言っているのは長広舌、長い講話を聞いているようなものだ。蘇東坡の言葉と同じである。

「山色あに清浄身にあらざらんや」

山の色合いだつて清浄を讃えているではないか。

「青々たる翠竹はことごとくに真如にして、鬱々たる黄華は般若にあらざるはなし」

自然と靈性とが一緒になつていふと言ふ。

この活物靈体論が井上円了の心身論哲学にとつてきわめて重大な意味を持つていふにもかかわらず、これは東洋独自の心身統一説だとは井上自身は言つていない。鈴木大拙という人は井上円了を剽窃したと思ふが、こういうのが「東洋独自の思想だ」といふ。鈴木大拙はデカルト的二元論は西洋的な原理で、心身統一論は東洋的な原理だと説いて、この心身統一説に基づいて東洋と西洋と分けた。円了と大拙のあいだに同じ心身同一説が引き継がれたとき、東西観が変換された。

問題は、円了の文章のなかにある、「靈魂説も自然に一変」というところにある。靈魂説というのは、むかしは靈魂と肉体が離れて靈魂が出たり入ったりすると考へていたけれども、それは駄目なんだ、間違ひなんだと。この、靈魂が出たり入ったりするのは間違ひだといふ言ひ方は、道元にもあるが、江戸時代の熊沢蕃山にもある。円了はそれらを知つていただらうが、それなら「自然に一変」といふ言ひ方は成り立たない。

## 五 今日の実験で靈魂説も自然に一変

「今日の実験で靈魂説も自然に一変」といふのはどこでいつ起こつた出来事なのかと考へると、私の推測では、井上円了が西洋の科学から学んだのではないかと思ふ。

ルネッサンスの生命論的自然観は、ガリレオ、デカルト、ニュートンの機械論的自然観によつて否定されたが、

ライプニッツ以降、生命論的自然観が復活した。シェリング、ヘーゲルの同一哲学は、その流れのなかにある。万物の根元にある流動性においては、存在と無、物質と精神、主観と客観は、不可分の流動的同一性をなしている。

そのきっかけは顕微鏡で、池の水を見ると、そのなかに生命がうようよしている。「一六六五年、二〇歳のフック (Robert Hooke 1635-1704) は『顕微鏡図譜』(Micrographia) というタイトルの本を出版した。この本はいくつもの分野におけるフックの研究結果や考え方を単に寄せ集めたものだったが、フック本人が描いた五七枚の驚愕の図版を通じて新しい奇妙なミクロの世界を明らかにしたことで大評判になった。ノミの解剖学的特徴やシラミの身体、ハエの目やハチの針を、はじめて人間の知覚のもとにさらした。単純な動物でさえ人間と同様に身体各部位や器官を持っていたことは、拡大された昆虫を一度も見たことのない人々にとって衝撃的な新事実だった。」(5)(二四六頁)。

今まで見ていた自分たちの世界とは全然違うものが顕微鏡下の世界ではあるのではないかと、いろいろな微小世界の構想が出た。金をつくることはふつうできないと言われていたけれども、金属のもつとずっと細かい粒子を操作すれば、金でないものから金をつくることができるかもしれない。ニュートンは微小粒子説に基づき錬金術に凝っていた。

われわれの肉眼に見えないだけで、どこにもありとあらゆるところに生命があつて、その生命体のなかでは精神と物質がいつも未分化の状態で一体になっているという見方が生まれた。生物に対するデカルトの機械論的な説明が影響力を失った。デカルトはその『光学』にレンズによる像の拡大の説明をしており、望遠鏡も顕微鏡もその原理をよく知っていたが、彼の思想的な影響は望遠鏡以後・顕微鏡以前である。

自然（肉体）と精神が分離しているというプラトン主義の考え方に対して、自然と精神がもともと一つだった、ずっと一つである、という見方は非常に新鮮な見方としてヨーロッパ文化のなかで大きな影響力を持つことになる。

「ロマン主義の自然研究にとって根本的であるのは、自然と精神の同一性を把握することである。自然の諸法則は、精神的なものの諸法則と一致するものでなければならぬ。自然学(Physik)と形而上学(Metaphysik)とは統合可能でなければならない。個別的なものに即しても普遍的なものが証明可能でなければならない。技術、実験、数学は、超越的な展望に向けて、矛盾することのないものであらねばならぬ。ロマン主義の自然研究は、経験的な特殊化も、思弁的な体系化も避けようとする。」(6) (Dietrich v. Engelhardt, *Naturforschung im Zeitalter der Romantik*)。

ロマン主義は、だいたい一八世紀、ベートーヴェン(1770-1827)の時代、ゲーテ(1749-1832)の時代と言ってもいい。『若きウェルテルの悩み』(1774)でゲーテは、自分のなかに燃えるような自然生命がずっと湧き出してくる、それをいま自分は感じている、それを自分はいま、ただ、夕暮れのなかで花が咲いて虫が飛んでいるという情景を見ているだけなんだけれども、しかし同時に自分の存在のなかでその自然の生命が燃え上がっているのが感じられる、と。

## 六 仏教理科

井上円了に、『仏教理科』という、おもしろい本がある。素人くさい自然科学思想で、いろいろなものを寄せ集めて自分の思想に適用している。

「靈魂滅亡論者は曰く、人死すれば靈魂は身と共に滅して生存することなしと。しかしてその考証とするところは古人ひとたび死して再び帰ってきたるものなく、また死後いまだ音信を伝えたるものなしというに外ならず。・・・その第一命題の靈魂は、身と共に滅すというはずでに非論理的なり。なんとなれば身は物質より成り、物質は不滅なれば、身また不滅ならざるべからず。身にして不滅ならば、いづくんぞ身と共に滅すというを得んや。」(選集第七卷四六三頁)。

ラヴォアジエが「化学反応を通じて質量の総量は一定である」と「質量保存の法則」を発表したが、一七七五年であるから、それが一八九八(明治三一)年の「仏教理科」に登場しても、不思議ではない。日本では、近代的な化学の概論が、宇田川榕庵「舎密開宗」(せいみかいそう)として一八三七(天保八)年に出ている。原版英文のドイツ語訳のオランダ語訳の漢文訳である。一八七八(明治一一)年に化学会が発足(会長は二三歳の久原躬弦)している。一八八七(明治二〇)年には、会員数が約一〇〇名(弱?)であった。会員名簿には、イギリスで化学を学んだ杉浦重剛の名も記載されている。井上と杉浦は政教社という団体で共同の活動をしている。

『仏教理科』と内容が共通する『奮闘哲学』には、「物質不滅、勢力恒存、因果相続の三大理法に照らさば、靈魂も不滅」(『奮闘哲学』選集第二卷二六四頁)と書いてある。物質不滅というのは質量保存の法則、勢力恒存と

いうのはエネルギー恒存の法則であろう。因果相続というのは、物理法則ではなくて、一般的な意味での、原因があれば必ず結果があり、結果には必ず原因があつて生ずるという考え方をさすと思われる。実際にここで井上円了が考えていたのは、有機物から無機物への変化は存在するが、無機物から有機物への変化は存在しないという関係である。有機物は必ず先に存在する有機物からのみ発生するという考え方は、先に引用した活物論と同じである。

人間は人間から生まれる、親から子どもが生まれる、猿から猿が生まれる。有機物は必ず先行する有機物からのみ生まれる。その理由は、有機物には、無機物には存在しない「生氣」（生命と精神のものになるもの）が含まれているからである。生氣のないもの（無機物）から、生氣のあるもの（有機物）は作れない。井上円了はこの生氣説を使って、「靈魂の不滅」を説いている。それが「靈魂説も自然に一変」と述べた理由である。

化学史の本には、尿素の人工合成が成功したので、生氣説の過ちが証明されたという趣旨のことが書いてある。

「一八二四年にヴェーラー (Friedrich Woehler 1800-1882) は、シアンとアンモニア溶液の反応で結晶性の白い物質が生じたのを確認したが、それはシアン酸アンモニウムではなかった。一八二八年、同じ物質がアンモニアとシアン酸との反応からも得られたさまざまなテストをしたがそれはアンモニウム塩でもなければシアン酸塩でもなかった。そこで有機物質が生じたのではないかと考えた。それと硝酸との反応は、尿素と硝酸の反応と同じであることが分かった。そこで尿から純粹の尿素を分離して同じ実験をやってみた。その結果、この結晶性物質は尿素と全く同一の物質であるという、予想外の結論に達した。当時、有機物質は生命体の営みとしてつくられるものであつて、無機物質からつくることができない、というのが化学者の通念

であった。これを生氣論という。ヴェーラーの尿素の人工生成は生氣論をくつがえすものであったが、かれの論文(1808)は短く、淡々としたもので、それによって生氣論は一挙にくつがえらなかつた。」(c)(島尾永康「人物化学史」)。

「生氣」(vis vitalis ラテン語)、「生命力」(Lebenskraft ドイツ語)は。もともと理論的に想定されていただけで、その測定の方法が定義されていたわけではない。「尿素の人工合成は生氣論の反証実験である」という命題を裏付ける証拠は何もない。「お化けはいない」と同様で反証できない。

ヴェーラーの尿素合成の後で出版されたリービヒ(Justus von Liebig 1803-1873)の有機化学の古典的教科書『動物化学』(1823)には、「生命力」について、こう書かれている。

「生命現象は物質と切り離せない。生きている体の各部の生命力の表出は生命力の担い手の形と、その基本粒子の配列の仕方によって決まる。生命力は、ある物質の基本粒子が一定の形に集まるときに、初めてその物質に具わり外に知覚されるようになる一つの特別な性質である。生命力は、重力や磁力のように無限大の距離で働くのではなくて、化学的力のように直接、接触するときだけ作用する。生命力は物質の構成要素が複合体になることによって感じられるようになる。生きている体の部分の働きを表わす行為によって、食物の元素が体の部分と同じ形と性状に集められると、その元素は体の部分に等しい能力を初めて手に入れる。この元素の集合により元素に宿っていた生命力は解き放たれて表われ出る。」(8)(リービヒ『動物化学』)。

もしも生氣説が正しいなら、化学肥料の有効性がなりたたない。この文章のなかに化学肥料の有効性という概念が秘められていることが読み取れる。リービッチから約一〇〇年経ったワトソンとクリックのDNAの構造解明(1953)がなされたときも、「生氣説の誤りが証明された」という話がでた。生命の遺伝を担う物質がDNAであることはわかっていたが、その分子構造が解明されて、元素の螺旋形につながる配列が示されたことで、生命体の内部に元素には還元不可能な要素(生氣)が存在するはずだという主張は否定されたと言ってよい。それが生氣説の誤りと言えるかどうか。「実際はヴェーラーの仕事は生氣説の最初の敗北に過ぎなかった」というアイザック・アシモフの言葉には含蓄がある(9)。

有機物から有機物への変化は存在するが、無機物から有機物への変化は存在しないという説はすでに間違いであることがわかっていたと述べて、井上円了を批判することは残酷である。一般社会あるいは化学者全体の理解水準からすると、無機物から有機物への変化は存在しないという考え方がずっと二〇世紀の前半部分あたりまで続いていて、これについて疑いを持つことに対してまた疑いを持たれるという、そういう時代状況があった。

## 七 ふたたび死生観の東西

「死生観の東西」という話になると、東洋ではこういう考え方、西洋ではこういう考え方という、東西を分ける見方が多かった。西洋は二元論、東洋は一元論などという大嘘が横行している。井上円了の営みは、そういう意味での「東洋びいき」の次元を超えていた。西洋からも、東洋からも学ぶべきものを学ぶという姿勢を示した。

死については、反復型、一回型という二つの見方があらゆる文化のなかに見られる。一回型は現代の科学ともなじみやすいし、一回型であることの本質性は、ハイデガーの『存在と時間』などの著作によって深く追究され

てきている。しかし、死生観を「もつ」ということは、どっちかに決めるといような性質のものではなくて、自分の気持ちになじむ観念で、さまざま信念と精神的に相克しないものを、いわば共存させるという場合もある。それが死生観の特色なのではないかと思う。

### 【註】

- (1) 山折哲雄『霊と肉』講談社学術文庫、一九九八年、二四六頁
  - (2) 山折哲雄『日本宗教文化の構造と祖型』東京大学出版会、一九八〇年、第三章「死のための団体形成」を参照した。
  - (3) カトリック回勅「ラウダート・シ」瀬本正之、吉川まみ訳、日本カトリック中央協議会、六五番。
  - (4) 松本正夫「離存形相の質料・形相論的構成について」『哲学』三田哲学会、四五号、一九六三年、二四頁。
  - (5) レナード・ムロディナウ『人類と科学の四〇〇万年史』水谷淳訳、河出書房新社、二〇一六年、二四六頁。
  - (6) Dietrich v. Engelhardt, Naturforschung im Zeitalter der Romantik, in: Festsello durch die Systeme, 1997, S.35.
  - (7) 島尾永康『人物化学史』朝倉書店、二〇〇二年、七五頁。
  - (8) リービッチ『動物化学』田中豊助・大原睦子訳、内田老鶴圃、一九八六年、一七二―一七三頁。
  - (9) アイザック・アシモフ『化学の歴史』玉虫文一・竹内敬人訳、ちくま学芸文庫、一二二頁。
- (二〇一六年三月二〇日開催、井上円了研究センター主催行事の特別講演録音に加筆・修正。)